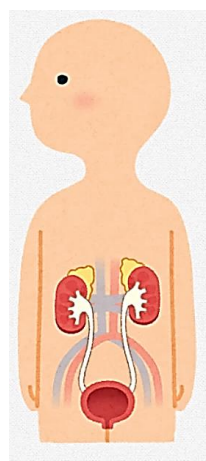


CKD とは？

医療法人 小金井中央病院
副院長 海野 鉄男

近年、CKD という医療用語がよく使われる様になってきましたが、まだ聞き慣れない方も多いと思います。

CKD とは、Chronic Kidney Disease の略で、慢性腎臓病を意味し、慢性に経過する全ての腎臓病のことを表します。最近ではCKD の患者さんは国内に約 2000 万人(日本腎臓学会編. CKD 診療ガイド 2024)と推計されており、これは成人 5 人に 1 人の割合となり、新たな国民病とも言われています。



CKD の定義は下記の①、②のいずれか、または両方が 3 カ月を越えて持続した状態のこと、とされています。

- ① 尿検査で尿蛋白陽性、画像診断・血液・病理などで腎障害の存在が明らかであること。
- ② eGFR(推算糸球体濾過量；腎機能を表す指標)が 60 (mL/分/1.73 m²；単位) 未満に低下していること。



CKDの初期では自覚症状がないことがほとんどで、それが患者を増加させている原因とも考えられます。腎臓はある程度悪くなってしまうと、回復しないとされる臓器です。自覚症状がないうちに次第に腎機能が低下すると、夜間頻尿、立ちくらみや貧血、手足のむくみや疲労感、息切れなどの症状がでてきます。また、こうした症状がでた場合、既にCKDがかなり進行して末期腎不全になっている可能性もあります。



CKDの早期発見には定期的に健康診断を受け、尿や採血などの検査をすることが大切です。特に尿蛋白陽性の方は要注意ですので、直近で受けた健康診断や人間ドックの検査結果があれば、eGFRや蛋白尿の有無を調べてみましょう。

よく分からない場合は、健診機関やかかりつけの病院で相談してみてください。



高齢者の透析

医療法人 小金井中央病院
透析室 臨床工学技士長 佐藤 成人

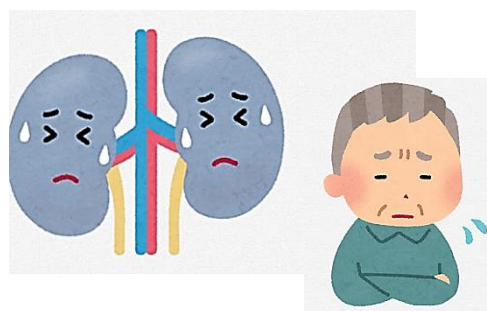
増加する高齢の透析患者さん

日本は現在「超高齢社会」と呼ばれるほど、高齢者の人口が増加しています。

2024年の65歳以上の割合は29.3%と過去最高になりました。2050年には37.1%になると推測されています。

透析治療を受けている患者さんの平均年齢も年々増加傾向にあります。透析患者さんの平均年齢の推移は、1990年は54.5歳、2000年は61.2歳となり、2023年は70歳を超えました。ちなみに療養病棟のある当院の平均年齢は73.3歳となっています。

また血液透析を始める年齢も、2000年は64歳が平均でしたが、2023年は72歳と高齢化が進んでいます。



高齢者の透析療法の課題点

高齢者では心疾患や骨関節疾患、認知症など、複数の合併症を併発している場合があります。加えて、食欲不振や筋力・体力の低下などから、日常の活動が以前に比べ低くなりがちです。透析治療に対する抵抗や不安も感じやすく、不眠など精神面への影響することも考慮しなければなりません。

こうしたことから、介助・介護が必要になることもあります。



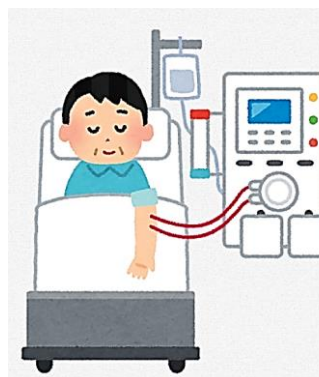
高齢者透析の工夫と対応

透析治療は使用する血液浄化フィルターの種類や血液処理のスピードで透析の効率を変えることが出来ます。体力のある患者さんは透析効率を上げ、どんどん毒素を除去することが望ましいですが、効率を強くすると身体にかかる負担は大きくなるため、高齢者には各個人に合った透析条件を体調によって合わせる事が必要となります。

治療中では動脈硬化や石灰化から急激な血圧の低下が起こりやすく、透析治療に低血圧時の気分不快等を訴えられずショック状態になることもあります。

患者さんの身体の負担をなくし安全に透析を施行するため、透析中の様子観察や声掛けで状態を把握し、異常があれば速やかに対応することが大切です。

また、透析治療は長時間、同じ姿勢で過ごさなければなりません。姿勢などを工夫して安全・安楽な治療をしっかりと受けられるよう配慮することが必要です。



治療期間が長くなる透析は、患者さんのみならずご家族にも時間・体力・精神的な負担がかかります。当院では、入院での継続治療、ご要望に沿った送迎や透析時間の調整等で、皆様に寄り添ったサポートを行ってまいります。

